

安藤 一校
補郎 藤

女四書

内訓

上

4
2601

館	大日本
函	〇
架	六
號	一〇
	架函



始



4
260₁

東京圖書印

美谷

内割

三條孝子書
時年九歲

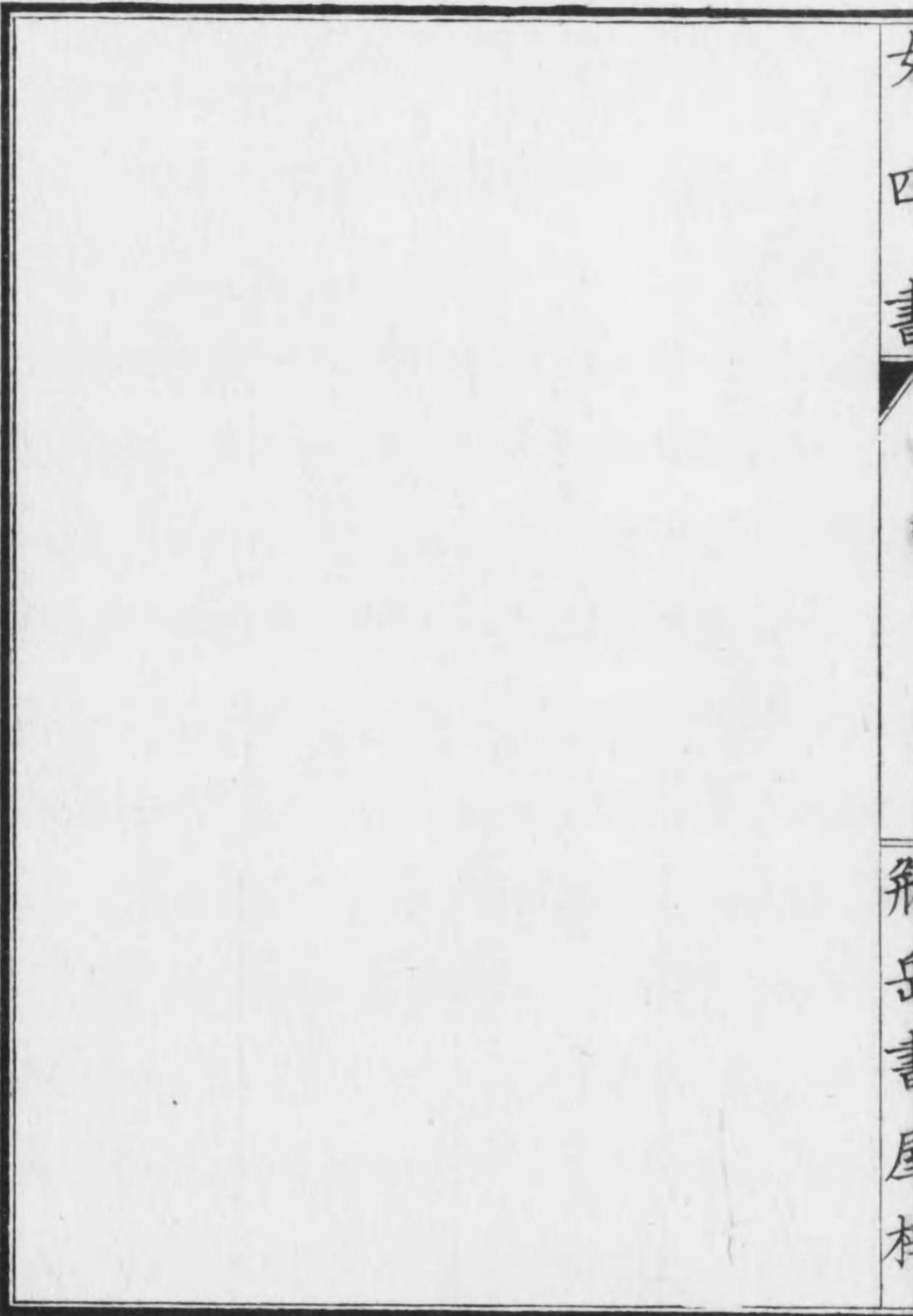


内割
。序一
反古書屋



意
筆

仁孝文皇后の明の成祖文皇帝の御后より姓
 の徐氏と云ひ中山の武寧王達といひ人乃
 女あり資質孝敬の志厚く能く帝意を順ひ母后
 高皇后の事へ又よく下を憫み人と慈しむ國家
 誠よ安らかりあり斯御徳備まり學文ありおれは
 常よ御母高皇后の衆の宮女達に仰せ聞られ
 教を侍り承まり其格言を綴りおのひろわ内訓
 二十章とあり廣く天下に公みり世に傳らゆは
 女たるもの鑑とあり給ひたりとありん



內訓卷之上目錄

- 德性章第一
- 脩身章第二
- 慎言章第三
- 謹行章第四
- 勤勵章第五
- 警戒章第六
- 節儉章第七
- 積善章第八
- 遷善章第九

- 崇聖訓章第十
- 景賢範章第十一
- 事父母章第十二
- 事君章第十三
- 事舅姑章第十四
- 奉祭祀章第十五
- 母儀章第十六
- 睦親章第十七
- 慈幼章第十八
- 逮下章第十九

○ 待外戚章第二十

內訓卷之上目錄終

內訓卷之下目錄

- 第一漢馬皇后之事
- 第二曹皇后之事
- 第三順聖皇后之事
- 第四班婕妤好之事
- 第五懷嬴之事
- 第六越姬之事
- 第七馮昭儀之事
- 第八周主父下婢之事
- 第九孟母之事

- 第十陶侃母之事
- 第十一敬姜之事
- 第十二穆姜之事
- 第十三樂羊子之事
- 第十四樂羊子妻之事
- 第十五晏子御者之事
- 第十六黔婁妻之事
- 第十七京師節女之事
- 第十八孟姜之事
- 第十九梁偉妻之事

○第二十五王氏妻之事

内訓卷之下目錄終

内訓卷之上

德性章第一

德性と云ハ男女不限らば生き出ると均しく天
 とあり與給へる明德我心乃中ふ備き系我云也仁
 義禮智信の五常も此德性より爲る所作なり
 生きたるは強く求むる非也每常心我正
 一行ひ道ふ適ひ侍まはる德性暗からば天理と我
 心と一體ふして人たる道立と云ふべし然
 ハ德性の譬ハ礎の如く形存との也大基も存家
 も礎固からささきを傾き倒き人の身も德性明ら

あらしき禽獸不異らば一と萬の惡行恣...
べし。此徳性と全うせらるる常不慎との心我遺
き起ふも居ふも道不適いんと願ひ侍らば。仮
令徳性乃鏡少時曇り侍ると後修行乃研磨ふと
二度素の如く明くあらずに至らばし。

修身章第二

修身と云ひ眼不惡き色我見之耳不淫きたる聲
我聞かむ口不傲き言と出さば身の行と正し
く修む事也眼不見耳不聽口不言ふの外不爲
所作ふも身乃行は害不形象中トと思ふべし

人の心の遷り易き物なりと見事聴く事言事
不は善く善も悪きも遷るを此あまば萬乃
事小心遣ひし勉め慎むべき事あり。緑色麗
しき衣裳我被る身我飾らんとりて真心ふし
物不逆いば了順徳もて身我修む徳乃光り身
我輝やかた事綾錦不勝り侍るべし。人ど不徳我
全うせざる稀形象物あまば常々心不拭く惡我
去り善不従ふこそ身我修む道も侍るべし
き故不古き諺も身と修むるは苗我養ふ如
し。苗と養えんとせば勤め鋤き耕し稗草我蔓

らせば家やうふまへに少し油断まきむ米の登
るよかあり人乃惡戎去る苗は稗草と同一とあ
らばや況して女の外ふ出で家内戎治む家も
乃あきむ先其身の行義作法正しくして家内の
人見習ひ徳ふ化しく治す家やうふまへき事也
我身乃行邪みして家内乃人比正うらば家と戎
責るを僻事ならむ也

慎言章第三

慎言と云む物云事戎慎しく輕々しく言ひ出さ
ぬ事也人の世ふたう一日は内見事聽事思ふ

事種々多きを故に言辭ふ顯さるべきの木偶の如ふ
しく萬乃事調をん辞道ふ適ひぬまむ其事整ひ
く悔事無るべし若理ふ違ひぬまむ必を災ひ
出來ると此也人の心の善惡も言ひ出さ辞みそ
顯るると此あきむ一言云ひ出さふも能々後前
考へ思案して云ひ出さむ既ふ云出さむり
てい必其辭乃違をば家やうふ行ふづ戎事乃
り尋常乃人比習として後前の辨もれく辞の云
ひ出し易きふ任せく物云ひく辞は下より爲所
作ハ云ふも似ざるありは淺間しき事なら

ぎや況女ハ天性静々あ家徳を備へた家物なり
 言多と尊生言多事多ハ失多ハ尚書
 夫の云ふ事女の出物いふ也
 鶏の時伐告ぐ家ハ譬へ其家必災起ると
 毛詩の女の辨舌過ぎた家ハ是乱まの端也
 誅り禮記の女乃言ハ相より外へ出た事
 戒めと只言と口慎と真誠と心
 備へ侍らば心と言と道ハ愜く自ら身も修ぬ
 家ハ齊ハ侍る故ハ女ハ顔貌の美ハ家
 尊とせ其行正と徳ハ勝と家ハ

夫昔一無塩といふ女ハ其形極く醜く
 其性賢く齊王立ると后とあり王其言
 を用ゐて齊國治まると此伐以て聖人の語ハ徳ハ
 多人ハ必忠言なりあらず言ハ必ら節ハ
 何と云ふと巧あり言の何人ハ必ら徳ハ
 きとのありと

謹行章第四

謹行と云ハ行為所作謹ハ正事也女乃行悪き
 三つ乃謂き有り一つハ我身を自慢して我
 爲を所作と盡く善きこと思ふ事二つハ人伐

蔑あやうろふしとく驕おごる心はあま事三つあま心あの悪と
 知しきどもも吾と我心わがこころ我欺あやまる善事よきことあま申まをすふと
 する事ことなり此三の意い一つもあらん人ひとの女の
 德行とくぎ欠かたる人ひとなりきば朝夕あすは慎しんしと勉めく我わがり行
 乃正ただしらんと我わが希まふべしはあらまき人ひとの慣あまと
 しく人前ひとまへふとる善よき人ひと此風このかぜとしく我わが獨ひとり在ある時
 へ見みる人ひとのあらまきば何事なにこと我わがなりても苦くるしらぬ
 ぬと思おもひく正ただしらぬと我わがも耻はぢる心こころなりく行いふ
 ことのありは只人ひととせばかりをせんと思おもひく
 眞實まこと此道このみち不た非た我わがをみる人ひとあまきと思おもひくと

天の照覽鏡せうらんかみに向むかふが如ごとくなりきばからずひあらぬ
 く身み乃行正ただしきやうに慎しんむべしら善惡よきあま共ともみ日々
 小重ちひり月々つきつき積たりぬきば小必大ちひもとなりそのあり
 きば初はじめは小ちひさき事ことなりられども後あとあらまき
 あらまき善惡よきあまと分わるしとの也なり譬たとへば木きの生なまらぬ嫩葉あやむ
 小崩出ちひだらば時ときを指さの先さきあらまき摘截つみきりらるとなり
 那なきども年月重としとしあり大木おほきと成なりきば斧鉞きりぎりあらまき
 小輒ちひく截きりがらまきと如ごとく物ものて女むすめ乃行なほ常つね小物柔ちひものなや
 小逆さかふ心こころなりく正ただしきと潔いさき道みち我わが守まもり外ほかの
 とい夫おとこ不任たがせらるとなりと内うちの事ことへ我わが役やくあり

と心得と勤め行ひ、家の内と治め、上下和順、一族親睦あひまとあひまきやうふあはれんを正き行と申侍り

勤勵章第五

勤勵と云い、其所作しよざた勤め勵む事あり、人と生きたる程乃物ハ、夫々汝為ままき所作しよざた家ものあまま情せうりせう縦たてふたてて空ひかく月日と送るくからん、はまま士しの學文武藝ぶぶぎと勤め、農民のうじんの耕作かうさくと勤め、職人の細工と勤め、商人の賣買うりかひと勤る如く、女も等と績い織縫いふ所作と勤めあはれん、古の聖人

の御代ごだいみわ、辱はづあくるも帝自ら鋤あと執り給ひと、三圃さんぼ土ど戎鋤あ給ひ、后自ら桑の葉と採りと蠶か戎餌あひ給ひと、民たみふ先まちちて勤むる所作と導き教へ給ひと、貴たかきも賤しずきも、女めの縫針ぬいの所作と勤む事定さだまふ職分ありと雖、貧ひき女めの其所作と勤るも常と心得こころえ能よく勤むるとはたけきとも、今時の人を少すくしく富とる女めハ、大抵たいてい奢ありふ耽たり我々所作しよざも情せうり侍まりとの多おほく、概おほく情せうりとのハ身みも修しゆらを家も紊みだるをとのたけきは情せうハ身みと劇ある刀やふて、其又ハ見みへはきどもりのり身みと戕やふ恐ろき

この也故に仮令位高くやんとあき人の娘だるとも、既に嫁入しとて夫に事する時ハ夫の衣裳の自ら裁縫被まづきとあり貴まら斯の如くあきん況其下方とや

警戒章第六

警戒と云ふは心も恐き戒むる事也何事も我心を以て恐き戒る事あり善きを疎く成行悪を日々も重り易き事の如く仮令に富貴なり女の時も誇りて驕の盈ん事を惧き戒め貧賤なり女に敗失く活計失はん事を惧き戒め常

に安樂なり女に兼てとり憂ひあらん事戒恐き戒むべし故に僅の念もたそれゆゑに邪をらば易やうに勤慎を獨り居る時もも舅姑乃前も居ると思ひて油断乃心あく能々誠の道戒守はべし斯の如く慎むべき徳家内も偏く行神明も通して昌へゆく事疑ひぬ常にも能慎む悪念は起る初め戒むべき過生せぬ豫り患ひあらんと戒恐れば禍來る事あり

節儉章第七

節儉と云へ奢侈戒防き分際相應ふは事也家

居衣類食物に至るは、ぐらちむる家を其身に立
 て、奢きるゑの徳と害ひ災と招くと定まる道理を
 きどるゑ、人ごゑ分際を過ぎ奢りゑ従ひ易きゑ皆
 是き志立ぬ理暗きと望起まり、一縷の糸も工女
 の勤より成り、一粒乃食も農人此力より出たる
 との如きべ、如何をのりの劬勞より作り出せる
 との如、輒はく奢み費さんゑ勿体なきこと思ひ、
 疎うぬらぬやうゑ用うべきと也、能此理と辨へ
 侍らば、華麗なは衣裳膏梁味の反て心ゑ安んぜ
 ぬゑ、簾末ぬゑ衣類食物足きりと思ふ心出侍

るべし、凡そ女の衣裳麗しくらむことを願つゑ
 人此眼に驚し、心は惑へゑん事、汝求むる邪
 心より起りて、浅果敢ある情根なり、誠の心を
 えゑ外乃飾の如、汝心ゑおけぬば、争々人ゑ慕
 き侍らんや、身ゑ綴衣と掛け侍るとも、心は錦
 ゑぬゑ侍らんゑ、女乃本意あらぬか。

積善章第八

積善といふは、毎常善業とゑ、慈悲の心、汝専と
 する事也、盛ぬゑも衰ゑも吉凶共ゑ天道より
 定りたる事と云ふべし、皆我身より為所作

みく、善き事積りぬきば天の福ひ茂蒙り、悪事積りぬきば天の災適まがとき事定まら道理あきば、常ふ慈悲の心と持善業と勤めあはべき事也。然るふ善き人の時ふ逢むて反て災難に遭ひ、悪き人の富と榮ゆふもらきば、之れ見る人善事とあへとも益なりあといふ人有り、は無智の人乃ゆふ事ふて道理ふ暗き心得あり、夫き善とあへて天の福と蒙り、悪とあへて天の禍ひふ逢ふとい定まら道理ぬきば、譬へ夏の日熱く冬の日寒きが如くみて、古も今も替らば定まら道理ふ

る、然るふ今悪哉なる人の反て榮えぬき善と為人乃反て衰るる、是き夏の日寒く冬の日暑きが如し、是ハ天地の變と云物あて、常の理ふ非きば、遇ふ五十年ふ一度或ハ百年ふ一度かゆる此事有ととも定りある事ありあらば、若善哉ある人天地の變ふ逢ひて其身福ふ逢むばと茂善業の積り子孫ふ報ひて、遂め昌へ行む、悪とあへて人天地の變ふてその身禍ひふ逢むばとも、悪業積ぬきば子孫ふ報ひて、遂め衰へ果つべし、能々此理哉考へ悟りて、慈悲善業とぬきまらべき事なり

故み乱りぬ家心出來るとのを云なり此の三の
過ち阿らん事を深く慎しと恐き悪の聊の事
なりとも改ぬ善の聊の事なりとも勉めあはぶき
と女ふ阿らまわしき道あらまや。

崇聖訓章第十

崇聖訓といふは古の聖徳備りらぬは后達の
行ひ徳業と常ふ仰せられし訓と我崇め尊ま
我身の師とあはと云なり禹王の塗山氏湯王
の有莘氏文王の后妃明の大祖の高皇后あとの
類の孰きも聖徳備り給ひ其帝の政を内ふ佐

は國我治め民を安んぶ常ふ明言を出し世の手
本となし給ひし古今比稀なる御方々なり
此賢妃聖后乃訓ハ一言なりとも金銀の如く僅
りぬるも寶とまぶく米塩の一日もぬくまか
をぬぐ如くふし末の世まで照し給ひ崇め
慕ひ奉りて貴き御身乃上みまさん斯道我慎
給ひ聊々も驕り給ふ御行ぬき事我懐ひま
下方の人ハ汝あり勵勤めく女乃徳行を修むべ
き事なり

景賢範章第十一

景賢範と云ハ古の賢婦貞女達ハ其徳純らあり
其行ハ備まら其行跡を書記したる書と讀
之。後の世乃女此手本とて學ヒ慕ふべしと云
ふ事也鏡み々容乃善惡見了如く古の賢女達
と鏡とて我り行の善惡と照し見バ善惡共ハ
明み々惡と耻善ハ進む便りとあり侍らんか
し。

事父母章第十二

是ハ親ハ孝行とあり事へ奉了事を述たる章也
夫き孝行といふも種々あり或ハ親を養ひ或

ハ朝夕侍仕し又ハ顔貌を柔和し居たりわ
孝行の末み々誠の孝あり然らば心の底ハ透り
慈し愛し敬ひ奉りて聊も親の心ハ違ひ奉
らば心成安給ふやうに其家と共を孝行の本
とい申侍るべし孝行の道ハ人の教と聞知
るべきも非也天性子なるもの心ハ備りた
る道なきとも女ハ他の家へゆくとのなき親
と疎くあり或ハ夫ハひかき或ハ子ハ惑ひく
つとゆる不孝ハ成行とのあり父母空しく成給
ひた家後過ありかとの不孝と悔い悲むとい

ふとも益明きとあきば、親の命朝夕を測りがごと
 き事と兼々心ふ忘きば、少時の間も怠るまじき
 事なり。又偶孝行の志ある人ふても、其身治まら
 ざしと人の嘲けきば、親を耻らしめて不孝ふ均
 しくきば、先我身と正しく治め譽とも得る人ハ
 孝行も自行をれ侍るべし。子の親ふ事へ奉家道
 姫の舅姑ふ事奉ると同一道理あきば、末の舅姑
 小事了章段と見合せ知るべきまとのあり。

事君章第十三

是ハ主君ふ仕へ奉りて忠と盡そ事と述べし。

章あり。女の主君ふ事るを親しく左右ふ近昵奉
 るふよりて、必押き易く驕り居るまじとのあき
 常ふ誠の道と心ふか希。禮義と謹と朝夕怠る心
 有るべうらば。仮令御寵愛ふ與らば、我一人
 専ふせんと思ふべからば、恩顧ありて何れと懇
 小仰せたるふとも、其寵とたのむ誇るべからば、
 恐き慎むを褻るし心有づからば、寵ふ誇り外
 には、此事まじも計らぬと思ひ、定りたる法、
 小守らざし我儘ふまじ人の禍逃るべからば、
 若吾寵愛ふ預くらばとも、君と怨むべうらば、人

乃寵愛と嫉むべからん。古より國家の榮へ衰ふ
 事多く女の心より起まり。女の善徳ある人の
 仮令主君の邪行を行ひたりとも、其身と正し
 くして朝夕に諫めぬわらざるも、君も遂
 に感し給ふ道入給ふ事、其例最も多し。勤へ知
 りて侍仕の道と慎むべき事なり故に苟も
 妻たるもの正しき道と以て其夫と匡へ輔けば
 きば、其家必だ衰へ亡ふべし。彼の木の枯朽ると
 のち内にお虫の生じて其幹と食ふよと、家の解
 き初るの寵戚怙と思ふ誇る婦人の夫と惑はる

と家故に女寵と戒むある敵と防ぶより甚と高
 きも卑しきも女たるもの恐き慎むべき事なり
 ぢや。

事舅姑章第十四

是に舅姑ふ事道と述たる章也。既にお嫁入し
 後、舅姑と我眞の親と思ひて孝行とあそべし。
 敬ひ愛し奉りて心と専ら誠と盡して少も
 惰さぶからず。或は衣裳と著せ奉り、或は食物と
 進め奉るの類に容バかり乃孝行あそべ。時と
 御心お適をばす事多かるべし。只心の孝行と本

とて誠の道と盡し常ふ其心の樂し安し給ふやうふ思ひ其志給ふ如ふ從ひて舅姑の慈し給ふ人の我も同しくいつる敬ひ給ふ人の我まもねねくうやゆひ何事ふは事ても我まふねさばして問ひ承り命と給ふとら飯令我心ふ合もば急ぎ其命の如ふ行ふべし舅姑の心ふ違ひ侍らば我夫ふ能事ると思ふとも夫の心ふ協もばして遂ふ離別の憂ひと招き生るの父母の名とも汚し忝くむるふ至る處し慎み情事なうき

奉祭祀章第十五

奉祭祀と云へ夫の家の先祖と祭り弔ふ時夫婦諸共祭の事と勤事也そき先祖の神靈と祭るる人道の大事なり誠の心天と等しくらばきば神靈享給る譬の透明たる玉成持ち日に向ひて火と求むきの忽ち天火來る曇暗りたる玉あきば力と盡して求むと雖天火移らばるが如し上天子の后より下萬民の妻ふ至るまじ誠の心と盡して先祖と祭り侍り神靈の感應と蒙りて身と有ち子孫裕へん事疑はらあべうら

母儀

母儀章第十六

母儀と云ハ、母は家人乃行儀正しく子と導教ふ
了道理なり惣として子と云とのハ、父もを憚り近
らむし、母も親しく家人とのなりき、母の
教肝要なり善惡共ふ大かゝ母も何やかりうは
るゆのなりき、母の徳義正しくして之と見倣ひ
て、自ら悪ふ陥らば善ふ趣くやうも育て教ふに
も慈し愛まふ志ハ我心の中も藏め置き、之
も對して如何も嚴しく烈しく其状を何して

教へ戒め、彼が縦肆なる行ふ従ふべうらば、愛せ
ると思ひ、彼が心儘も育て、悪人と成侍まば、反
て憎むも同しからむや。

睦親章第十七

睦親と云ハ、親類一族の人も親しく睦まほし
也。仁の道ハ、慈悲恩愛と本ともなり、親類も他人
も愛せんとす、そのなりきとも、其内も次
第ありて、先他人と親しく愛して親類を次とす
ハ、僻事ありき、第一も一門一族と親しくして、其
餘り或他人も及ぶべき事あり、譬ハ樹木の根

み生氣^{まき}たりて枝葉^{えだ}やも榮^{さか}しめ、内^{うち}に燃^もる火^ひの光^{ひかり}
 を外^{そと}に顯^{あらわ}るが如^{ごと}く、固^{かた}まじり我親類^{わがしんるい}と親^{おや}しく思^{おも}ふ
 心^{こころ}へ誰^{たれ}もあはさざるべきが、其縁者^{そのえんしや}あどりのありの、他
 人^{ひと}に於^おきて、別隔^{わか}の心^{こころ}たりて疎^そまきものあり、此^{こゝ}心^{こころ}皆^{みな}
 道理^{だうり}に暗^{くら}きとより起^おき、縁者^{えんしや}とつゝ物^{もの}も我親類^{わがしんるい}
 とより出^いださるゆゑのりあき、わづらう他人^{たにん}の如^{ごと}く
 思^{おも}ひ侍^まらんや、九^{こゝろ}そ親類^{しんるい}一門^{いっもん}と交^まるの道^{みち}は、人の
 善^{ぜん}い聊^{さう}も心^{こころ}に遺^いき、惡^{あく}い打流^{うちりゅう}して心^{こころ}に留^{とど}む、ひ
 たせら親^{おや}しく睦^{むつ}しき心^{こころ}と深^{ふか}くして交^まり侍^まさば
 自ら一族^{いっしやく}和順^{わじゆん}して其家昌^{そのけさう}ふべき事^{こと}こそぞ、

慈幼章第十八

慈^{いと}幼^{ちゆう}といふは、幼兒^{ちゆうじ}と慈^{いと}しく愛^{あい}する事^{こと}あり。人の
 親^{おや}の子^こと愛^{あい}する道^{みち}は、天性^{てんせい}あきば誰^{たれ}も同^{おな}じある
 べし。然^{しか}せども愛^{あい}を家内^{けい内}に教^{おし}へたりて恣^しやうと志^し
 ぬらそ誠^{まこと}の慈愛^{いとあい}の道^{みち}あるべし。けき其子^{そのこ}の心中^{こころ}に
 小^こ育^{よく}つゝある姑息^{こくそく}溺愛^{にやくあい}とて反^{かへ}て子^こと憎^{にく}む人^{ひと}
 斯^{かく}の如^{ごと}く育^{よく}て子^この惡^{あく}しくありたる後^{のち}に子^こと
 責^せむべきもあらば、皆^{みな}親^{おや}の罪^{つみ}あるべしとぞ。

速下章第十九

速^{すみ}下^かといふは、下^{した}さばの女^めと憎^{にく}む誘導^{きうどう}くゆるふ

は事なり古の賢女の夫の子孫繁昌の爲み徳
義正しき女はきび我口より言上り侍仕み出
給ふべ況て嫉妬給ふ心を聊もゆるく反て愈親
く懇み給ふ事其例少あらざ我一人寵愛何
らんと成願ひて怙氣の心有るを禍と招く基也
我外み夫み事ら女ら引立ち心と持て常々
夫も好きはみいひなり侍きべ夫も妻のおと
なりき心と感して妻と見捨て怙氣深き妻の邪
見ゆる心あるみより夫も恐るしく思ひつら
とわく次第ふ遠ざかり隔たるとのゆるきべ上下

の隔るゆるく悉く親しむ和して家の昌へ子孫の
繁昌せん事を思ふ妻は自ら其身榮え家を保つ
べき事なりべし

待外戚章第二十

待外戚といふは天子の后貴族高官等の夫人奥
方と喚き給ふ御身の我親類と時めか驕ら
給てぬ心とら乃事也君の御寵愛深きふ任せて
我親類を世み出し時めかまある必未遂せし
反て禍を招く媒とあるとのあり素より備はり
來き了高位高官の人を其才徳秀ぶたる人み

國の政事を行ふと邪なる事有らば内縁みそ才
徳と撰むべし俄ふ高官ふ上る人ハ才智暗々きバ
公務非道の多事おほく又ハ内縁の強きと恃
て人と輕んぢる故ふ萬人の怨と憤り成蒙りて
遂ふ國乃乱き身は禍と得ん事疑ありはきバ漢
乃馬皇后唐は長孫皇后やどの帝より御親類と
世ふ出—政とも執行せ給えんと度々論言有
きとも此理とよく知り給ひて深く辞退—給ひ
た多故ふ禍遂ふ至らばり度榮え行き給ひ
りふ漢の呂后霍后唐の楊貴妃やどのハ此理りと

辨つて我親類と時々の—給ひ—故も何き
も天下と乱—身と滅—行末淺ま—成果侍
りる恐き誠むべき教ありきや

内訓卷之上 終

終

